

【翻刻】

資料5 「総社市以南高梁川流域の水害と将来の展望」（真備支所から移管文書 123—31—9
「小田川治水調査特別委員会綴」）

（ ）内は資料筆者の注記。〔 〕内は引用者の注記。

昭和四十二年三月

総社市以南高梁川流域の水害と将来の展望

高梁川流域の水害と将来の展望

高梁川水系より流出の砂礫は、吉備文化の発祥の因となり、更に近時躍進の水島文化を生じたるも、反面には幾多の悲惨な水害記録が残されている。

嘉永元年戊申〔嘉永三年庚戌〕の中秋、安江堤防決壊し、五十八ヶ村悪水漂うこと二十日ばかりと記されている。

明治二年己巳七月六日午後九時、旧四十畝〔瀬〕新田村の内字三軒屋大藪下決壊し、五十八ヶ村災禍をうけ、人家十七軒破損した。

明治十三年、富原村（現総社市）の堤防決壊し、更に下流下原村（現総社市）堤防を決壊し、急激なる水勢は有井村（現真備町）末政川堤防決壊し、尚も水勢は箭田村（現真備町）高馬川堤防を破壊し、更に小田川左岸堤防坪田東（有井村地内）を決壊し、同右岸二万（現真備町）堤防決壊し泥海と化し人家多数流失し、殊に有井村は死者三十三人という大悲惨事であつたと伝えられている。

明治十九年度は、富原村堤防決壊により下原堤防大決壊し、現田圃なかに点在する砂山は当時の惨状を物語る痕跡として残存している。

明治二十六年十月の大洪水は、高梁川水害史上空前の大惨禍であつた。記録によれば、賀陽郡井尻野村湛井（現総社市）湛井堤防決壊（切口三百間）し、更に下流軽部村水門附近決壊した。右岸は上秦村堤防決壊し、下流の人家はほとんど流失し、多数の死者と田畑は荒廃したと記されている。富原村上流堤防決壊し、急激なる水勢は下原堤防を破壊し、同時刻下道郡川辺駅（現真備町）舟渡し場堤防決壊（切口五十間）し、水勢は益々強化され、末政川堤防破壊され、続いて小田川左岸堤防坪田東を破堤し、尚も水勢は小田川を横断し右岸二万堤防を決壊し、高梁川沿岸の流失家屋は二万役場前迄達したと伝えられている。

上流尾崎村、妹村、服部村（現真備町）の小田川左右堤防は高梁川の急激な逆流のため堤防天より三尺五寸〔約 106 cm〕も嵩み、全地域は未曾有の大惨状となり、殊に川辺は当時三百有余戸の栄えた村であったが、上流堤防決壊のため百十八人（県下で死者四百二十三人）の尊き人命を失い〔宮内庁宮内公文書館所蔵「備中国水害書」によれば、下道郡全体の死者数が一八一人、うち川辺村は五四人となっている〕、家屋は流失又は全半壊し、残った完全な家屋は二十戸と伝えられている。かかる人生最大の悲劇のため、富める者は後難をおそれ他村に移住し、貧しきものは流浪の旅に出るなど、或は流失の屋根棟にのり内海漂流中助けられた所に永住するものもあり、現在戸数二百四十六戸という大きな痕跡が残されている。

下流では、上酒津一ノ樋下決壊し、更に同時刻古水江一ノ樋下決壊（切口二百三十間）し、水深二間四一五尺の泥海と化し、濁流鶴新田附近に流出のため紛争となり、大惨禍の上に更に惨状が加へられたと記されている。

右岸は、（水江村又串）の上流二ヶ所決壊し、山手の家屋「六一七軒を残し町筋は、ことごとく押流し、舟穂、長尾、中新田、上成、吉浦、狐島、九島、鉾島、八島、道越、亀山、八重、下木、赤崎新田、九々井、玉島に水湛へ、家財を失ひしもの数しらず」（「 」内は原文のまま）、東高梁川左岸堤防は関係住民の必至の水防の結果、堤防決壊は免ぬかれたが、冠水のため大被害であったと伝えられている（明治二十七年甲午二月、七十四翁木谷重春の記録中より抜すい）。水害面積一万四千町歩に及び、未曾有の大惨禍となり、更に水害後に流行する伝染病のために二ヶ年にわたり続発し、多くの死者数が記録されている。

明治三十三年度には、高梁川右岸川辺地内と有井地内二ヶ所決壊し、両所に池沼が残存しているが、川辺内堤〔神楽土手〕内は辛ろうじて水禍を免ぬかれた。

◎其後の動向

前述のごとき筆舌に絶する水禍が度々のことで、住民の苦悩に対し時の政府は刮目し、明治四十年、内務省直営工事を起工し、現在の雄大にして画期的大堤防建設事業は十八ヶ年の歳月を経て大正十四年に完成した。

この完成によって地方沿岸民のうける恩恵は大なるものがある。すなわち、昭和九年〔室戸台風〕は同川最高水位にして備中広瀬では二十六年度より三尺五寸〔約 106 cm〕も高かったが、下流では改修以前の堤防天すれすれの、又は越流四一五寸の所もあつたが、決壊を免ぬかれたのは先人の功績であることを忘れてはなるまい。然るに、昭和二十年度の大雨〔枕崎台風〕には小田川左岸二万村境下手堤防は決壊寸前の大崩壊し、他の二ヶ所も崩壊あり、将来の

ため見逃すことはできない。

近時、県は県民福祉のため高梁川水系にも二ヶ所にダムが建設されている。農業用水小阪部川ダム（総貯水量千五百六十三万八千八百八立米）と工業用水河本ダム（総貯水量一千二百万立米）の出水時放流の際、県の放送によれば下流で一米程度水位が上昇するから警戒するよう注意されているが、この一米上昇に問題点がある。たとえば降雨量に相当した上昇か、ただしは放流による異常水位上昇がふくまれているか、万一放流による水位上昇がふくまれている場合は、目下建設中の新成羽川ダム（総貯水量一億二千七百五十万立米）（山陽新聞の記事の立米）の完工後、万一昭和九年九月の降雨量に匹敵の出水時放流の際、異常水位上昇は治水上重大な問題点である。

新聞の記事に、天竜川水系の大惨禍、本県旭川水系の百間川放流地帯の冠水による大被害等、対岸の火災視するより一步掘り下げて調査研究し、水禍の大惨事を再び繰り返さぬようすべきであろう。

〔中略〕

◎治水の主なる危険地域は酒津取水堰堤附近ではなかろうか。理由は急流高梁川出水と小田川出水と合流し水勢は強化し酒津堤防に激突するため、過去にも護岸の補強工事が施工されている。尚、過去にも堤防決壊は水流のつき当りと樋管の場所が多い。

上流真備町地内、小田川左岸堤防二万県道以東地域は、昭和二十年度出水時に堤防天六割を残し一挙に大崩壊し、決壊寸前の惨状となり、更に崩壊は延長し二百六十米に及ぶ。他にも二ヶ所崩壊している。すでに危険水位ではなかろうか。

◎対策案

湛井以南流域の水害を防ぐためには、岡山百間川放水路のように警戒水〔位〕以上は旧柳井原ダム上流堰堤を一部切下げて旧西高梁川に放流し、合理的な併行合流となれば一挙に上流も下流も救われ、尚取水堰堤保全にも一助となるのではなかろうか。四囲の状況により一步掘下げて検討する必要性はないか。

〔中略〕

昭和四十二年三月一日

吉備郡真備町大字下二万

妹尾彦次郎